

3. 歴史における境界(1)―国境・国民

2025.10.20. 大橋 幸泰

はじめに

私たち(現代人)も歴史的存在：現代人の常識・価値観は歴史的に形成されたもの

国民的帰属意識(ナショナルアイデンティティ)は自明か？

* 「日本人」というカテゴリー、「日本国民」という意識は超歴史的に存在したか？

→国境と国民について考える

1. 国民国家の成立要件

国家の成立：原始から古代への転換のなかで登場

→しかし、その性格は古代から現代まで可変的

→近代(～現代)国家：国民国家

* 成員が均質で、国民としての一体感を持つ国家

→その成立要件

ア. 明確な国境 (→「2. 明快な国境の成立」)

イ. 国家としての主権 (→「3. 主権国家の成立」)

ウ. 国民的帰属意識(ナショナルアイデンティティ) (→「4. 国民的帰属意識の成立」)

(木畑洋一「世界史の構造と国民国家」歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店、1994 年、による)

2. 明確な国境の成立

17～19C 中の蝦夷地・琉球：幕藩制国家の外側

* ただし、完全な「異国」ではなく、「異域」という位置づけ

→線としての国境は存在しない

a. 北の国境

日露和親条約(1855)：日露の国境を、択捉島と得撫島との間に規定したのが最初

* 蝦夷地を北海道と改称(1869)

b. 南の国境

琉球藩設置(1872)を経て、琉球の廃藩置県を断行(1879)

* 明治政府、武力を背景に沖縄県設置を宣言：琉球処分

国民国家としての日本の国境：1880年前後にほぼ成立

→北海道・沖縄：以後、本土への同化が強制進行

→「異域」から内国植民地へ

3. 主権国家の成立

古代～中世の長期間、中国の冊封体制の影響：中国を中心とした華夷秩序

* 7C から自立志向：自前の律令と貨幣

→ただし、15C 初、室町幕府 3 代将軍足利義満が明皇帝から「日本国王」の称号を与えられたことに見られるように、豊臣政権期まで中国中心の東アジアの国際秩序の中に組み込まれていた

- 近世、東アジア秩序は、中国・朝鮮・日本の微妙なバランスの上に「安定」
- 近代、欧米との不平等条約
- 19C末～20C初、日本は自ら東アジアの盟主となるべく帝国主義国として名乗りをあげるとともに、欧米との不平等条約を解消：主権国家として認知される

4. 国民的帰属意識の成立

帰属意識(アイデンティティ)の成立要件

- ①他者との接触
- ②権利の獲得

*ただし、同一人物が複数の属性を保持しているから、帰属意識はあくまで相対的なもの

近世百姓の場合

- ①' 「鎖国」状況のもと、四つの口の周辺を除いて「異国」人との接触・情報は少ない(まったくないという意味ではない)が、都市・村の移動・交流は活発
 - ②' 藩・幕府(国家)の政治への参加権はないが、村・村連合の自治への参加権は保持
- 幕末維新期の民衆、政治に関しては客分意識を保持：国民的帰属意識はまだ未成立(史料1)
- 民衆の客分意識の払拭に自由民権運動が大きな役割を果たす(史料2・3)
- *自由民権運動：政府に対して民衆の権利伸張を訴えるとともに、民衆に国民としての自覚を訴えた運動
- これを基盤に、日清・日露戦争を経て、国民的帰属意識(ナショナルアイデンティティ)の浸透へ

国民国家としての日本：19C末～20C初頃(日清・日露戦争期)成立

* 19C 中以降、国家による規律化の促進と連動

→国家による規律化を民衆が内面化することによって、自ら国家を支えることを志向する「国民」が成立

おわりに

国民国家：実際には「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)

- * 国家に限らず、帰属意識の形成はその集団の一体感を生む一方で、個々の個性を切り捨てる機能ももつ
- 「～らしさ」に内包される問題性：差別や排除の論理の形成
- そのもっとも深刻な矛盾：国民国家におけるマイノリティー

「日本」「日本人」という枠組み：歴史的変性をもつ歴史的産物

→時代によって、「日本」「日本人」の範囲・内実は異なる：「日本」とは？「日本人」とは？断定することの危うさ

* 「日本史」という科目名は妥当か？

【参考文献】

- 歴史学研究会編『国民国家を問う』(青木書店、1994年)
- 西川長夫『国民国家論の射程』(柏書房、1998年)
- 吉田 孝『日本の誕生』(岩波書店 [岩波新書]、1997年)
- 牧原憲夫『客分と国民のあいだ』(吉川弘文館、1998年)
- 鹿野政直『化生する歴史学—自明性の解体の中で』(校倉書房、1998年)
- 紙屋敦之『琉球と日本・中国』(山川出版社、2003年)
- 池内 敏『竹島—もうひとつの日韓関係史』(中央公論新社、2016年)
- ベネディクト・アンダーソン(白石さや・白石隆訳)『増補 想像の共同体』(NTT出版、1997年)

【付記】

- ・明日までに、Waseda Moodleにて講義記録の提出を求める。